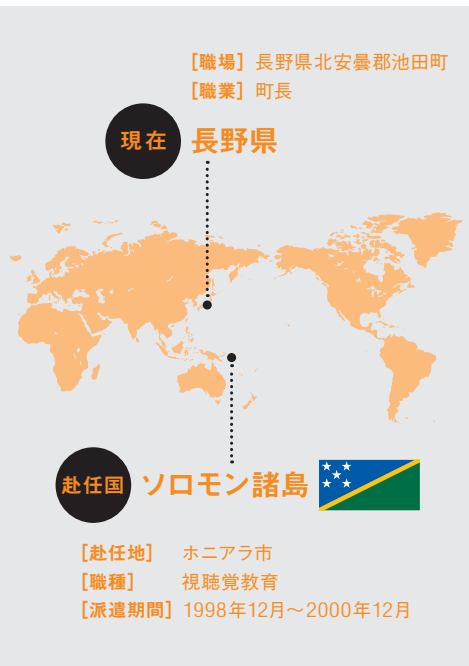




程よい田舎の未来に、種を蒔く

矢口 稔さん 長野県北安曇郡池田町 町長
Minoru Yaguchi

異なる文化や価値観に触れ、人々との温かい絆を育んだ経験は、
新旧の住民が共存する池田町で、住民の声を聞き、
未来を切り拓くリーダーシップに活かされています。

“ボス”ではなく “リーダー”として

矢口さんは、町議会議員を経て2024年に53歳で町長に就任した、歴代でも若手のリーダーだ。「町長になった途端、決断を迫られることが多くなりました」という矢口さんだが、その決断が具体的な成果として現れることに大きなやりがいを感じていると話す。

池田町で生まれ育った矢口さんは、2011年に「行政に意見を言える若者が必要だ」という周囲の声に後押しされ、41歳で議員に当選。当時の町議会では一番の若手だった。それから13年間、4期にわたって議員を務めた。「行政をチェックするパイプ役だった時期が長いので、今でも自分は“ボス”というより

“リーダー”といったタイプ。住民の皆さんの話をよく聞き、その上で最適な決断を下すリーダーでありたいと思っています」と、学校給食費や医療費の無償化のように、住民目線で必要と思う政策を着実に実現している。

町おこしにも精力的だ。従来から「花とハーブの町」を掲げてきた池田町だが、豊かな水源に育まれてきた酒蔵とワイン用のブドウ畑に注目し、「お酒の町」としてのブランド化を進めている。2024年には、地酒・地ワイン・ソフトドリンクで乾杯することを推進する「乾杯条例」も制定された。矢口さんはその様子を「議員の皆さんが、乾杯を巡って真顔で意見をぶつけ合う姿が面白かった」と振り返る。

そんな矢口さんには、「守りたいもの」

と「変えたいもの」があるという。「池田町というありふれた町名からは、ここから望む雄大な北アルプスの景色は想像もできないでしょう」と、豊かな自然環境を“守り”、池田町に対する意識を内からも外からも“変えていく”ことに意欲を見せる。「過疎でもない“ほどよい田舎”としての町の魅力と、地域に根付いた温かい人間関係を大切にしていきたい」と語る。





カウンターパートのデスモンド・ママタ氏と。カメラ操作を指導し取材にも一緒に出かけた。



ソロモン隊員のソフトボールチーム「チーム・コロラコ」の仲間たちと。チーム名の意味は「ニワトリ」。



ソロモンで人々の温かさに触れた矢口さんは町長となりその経験を地域に還元している。

ソロモンでの経験と 絆に支えられて

矢口さんの人生に大きな影響を与えたのが、JICA海外協力隊（以下、JOCV）の経験だ。

家業の電気店を継いだ矢口さんは、20代前半の頃に長野県や内閣府が実施する国際交流事業に続けて参加する機会があり、海外への関心を深めていった。その後「自分の技術が世界で通用するかを試したい、困っている人々に技術を伝えたい」という思いから、JOCVに応募。ソロモンへ視聴覚教育隊員として派遣されることになった。

技術者として十分な経験があった矢口さんにとって、同国唯一の高等専門学校図書館で教育用ビデオソフトの制作を指導するといった活動は順調に進んでいたが、突如、国内でクーデターが発生。半年間の自宅待機を経て無念の帰国となってしまった。「持ち帰れたのは写真のネガフィルムのみという厳しい状況でした」しかし、新婚旅行で再びソロモンを訪れた矢口さんは、現地の人々が自分の帰りを待っていたことを知り胸を熱

くする。クーデターの混乱で略奪が横行する中、カウンターパートが矢口さんの荷物を一つ残らず守ってくれていたのだ。

「停電や湿気といった暮らしにくさもありましたが、裸足で過ごす子どもたちや、物々交換の文化に触れる中で、多様な価値観に触れることができました」ソロモンの人々との温かい交流は、今も深く心に刻まれている。そして、こうしたかけがえのないJOCV経験は、矢口さんの現在の町長としての哲学に深く根付いている。

JOCVは 自分と未来への種まき

「耳は2つ、口は1つ。だから、2つ聞いて1つ話すくらいがちょうどいいんです」と、自分が話すよりも相手の話を聞く、という矢口さんのコミュニケーションの持ち方は、JOCV時代の多様な人間関係と異文化の暮らしの中で身につけたものだという。こうした柔軟な姿勢こそ、従来の住民と新しい移住者が共存する町において住民の期待を集めるリーダーシップの真髄なのだろう。

矢口 稔さん プロフィール

長野県北安曇郡池田町出身。家業の電気店を継いだ後、JOCV参加。40歳で町議会議員に当選。学び直したいとの思いから44歳で大学に入学し、48歳で学位を得る。2024年に53歳で町長に初当選し、現職。

JOCV活動が自身の礎になっていることを確信する矢口さんは、「帰国から四半世紀経ち、相手のために尽くした行いが、時間と空間を超えて必ず自分や日本社会に返ってくることを実感しています」と、JOCV活動を「種まき」に例えて評価する。まさに矢口さんの歩みこそが、一人の人間が国際的な経験を通じて成長し、その学びを地域に還元していく姿を示している。

「池田町には現在、海外の姉妹都市はありません。自身のJOCV時代の縁を活かし、ソロモンとの交流も視野に入れていきたい。そして、いつか役場職員をJOCVとして送り出し、その経験を町の活性化に繋げていければいいですね」矢口さんの柔和な笑顔の裏には、程よく心地よい町の未来を見据え、理想を形にしようとする揺るぎない信念が宿っている。

矢口さんへの エール！

Ren's Guesthouse/
Ren's Dining オーナー
ジェン・ティヴィエット・
リエンさん



みのるさんは住民の多様性に寄り添えるリーダー

私は雄大な山の景色に魅了され東京から移住してきました。矢口町長とはご近所で、議員の頃から数少ない外国人移住者の私に関心を寄せ、何かと気にかけてくれました。今も犬の散歩でばったり会うと気さくに話かけてくれますし、私も親しみを込めて「みのるさん」と呼んでいます。程よい田舎町にぴったりな、多様な人々に寄り添えるリーダーだと思います。